

『古い借金を新しく返す方法』におけるオーバーリーチの狂気と治療 —モラルティ回帰の手段として—

丹羽佐紀

はじめに

フィリップ・マッシンジャー (Philip Massinger, 1583-1640) の『古い借金を新しく返す方法』 (*A New Way to Pay Old Debts*, 1633) は、マッシンジャーの作家活動の中でも比較的后期に位置づけられる、1625年頃に初演されたと考えられている。¹ 上演当時のイングランドは、ちょうどジェイムズ1世からチャールズ1世の治世へと時勢が大きく変化した時代である。² 国内外における様々な政治的ならびに宗教的・経済的側面の過渡期を背景として、劇作家や劇場をめぐる状況も、ステュアート朝の時代から変遷を遂げたことは想像に難くないが、同時に当時の市民社会の状況を知る上でも、この作品は手がかりを与えてくれる。まず劇の演出においては、ジェイムズ1世時代にもはやされた、お金のかかる大掛かりなスペクタクル的要素は影をひそめ、時代が移るにつれて、Giffordの言葉を借りれば「よりエレガントで分別ある娯楽」(‘more elegant and rational amusements’)へと移行していった。(11) またマッシンジャーは、国王一座と関わり続けながら、共作も含めた劇作の仕事をこなしてゆくが、『古い借金を新しく返す方法』においては特に、市井の人々と貴族のそれぞれが持つ生活スタイルを彼なりの観察眼をもって捉え、登場人物たちの描写の中に現実の社会に息づく人々の生活場面を織り交ぜていったと言える。さらに Gifford はマッシンジャーの劇作品に、彼のカトリック教徒としての面を見ることができると指摘しているが、(‘Massinger’s works has convinced me that he was a Catholick.’) 宗派的要素はともかく、当時の市民社会に一定の秩序を根付かせる方向へプロットを展開させるという点において、少なくとも彼の劇作品は、喜劇的な展開の中にも道徳的側面を持つと言える。(9)

本稿では、風刺喜劇としての様相を色濃く映し出すこの劇において、とりわけ強欲の塊と捉えられることの多いオーバーリーチに着目し、彼の狂気をもたらす劇的効果について論じる。劇の最初の場面で、自分の抜け目なさを周りに豪語し虚勢を張っていたオーバーリーチは、5幕に至ってついに正気を失う。彼が迎える結末は劇のプロット全体にどのような効果をもたらしているのか、彼および彼を取り巻く登場人物たちとの関係性から考察する。

まず、オーバーリーチは懲らしめを受ける。当てにしていた娘マーガレットの玉の輿と、それに便乗した自分の出世への期待は5幕1場において水の泡と消え、彼は最終的に、それまで自分に媚びていたマロウルにさえ裏切られてしまう。彼の目論見を次々と打ち砕く登場人物たちのイントリグ・プロットは、基本的に彼の強欲を挫くための懲らしめという形をとる。ただし、オーバーリーチ本人は深刻な苦しみを味わう羽目となるが、あらずじ展開はあくまで喜劇的で、劇は最終的に、放蕩者ウエルボーンの名誉挽回と財産回収、ラヴェル卿とオウルワース夫人の結婚といった結末に丸く収ま

る。次に、5幕1場においてオーバーリーチが正気を失ったという客観的診断を下すのは、牧師のウィルドゥである点に注目したい。ウィルドゥは劇中において、一方で聖職者という立場からマーガレットとオウルワースの結婚を執り行いつつ、他方で医術に心得のある者として、オーバーリーチの病状診断と今後の治療法を登場人物に指南する。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*, 1594) においても、ロミオとジュリエットの結婚式を執り行うロレンス修道士は、聖職者であると同時に薬草の知識に長けた人物として、恋人たちに仮死状態をもたらす薬を調合する。³ 『古い借金を新しく返す方法』においても、牧師のウィルドゥは、登場場面はそれほど多くないにもかかわらず、幕が閉じた後のオーバーリーチのその後を観客に予感させる人物として、重要な役割を果たす。

さらにオーバーリーチがイントリーグ・プロットに引っ掛かり発狂するという劇展開は、彼の強欲を最終的に、懲罰の対象ではなく治療が必要な病へとすり替え、それによって他の登場人物が、彼を断罪するのではなく矯正することを可能にする。換言すれば、彼の強欲は周りの看護により、病気の治癒とともにいずれ消えゆくものとして、劇全体の秩序回復の中に吸収されていく。登場人物たちは、オーバーリーチも含め、誰もが最終的にはそれぞれ本来あるべき場所へ帰り、コミュニティの中へ戻っていくという点で、マッシンジャーの劇は、喜劇でありながらあくまで時代に即した道徳性を保つのである。

1. オーバーリーチの強欲をめぐる背景

17世紀ロンドンにおける市民性の変化について、Perry は、裕福な市民として台頭することにより都市の基盤を支える存在となった人々が、賞賛の対象と見做されるようになった面を指摘している。

Moreover, since the city's wealthy were seen as an open elite by the rest of the populace, they were regarded as examples of attainable civic glory and were the focus of popular ambition rather than of popular resentment. (Perry, 189)⁴

その一方で、行き過ぎた独占的な富と地位の獲得に執着する人物に対し、一定の抑制を求める動きが、当時のイングランドの貴族および市井の人々いずれにも芽生えた側面は否めない。特にオーバーリーチのような、市民社会で急激に財を成しながら、それを元手にさらに上へのし上がろうとする人物は、従来の階級制度という構造の中で良くも悪くも維持されてきた社会的安定を脅かす存在として、敬遠される対象にもなり得た。そこから浮かび上がるのは、富を蓄え力を得ることにより権力にあやかろうとする者と貴族の階級にある者との、意識的な断絶である。『古い借金を新しく返す方法』の2幕1場においてオーバーリーチは、一方で「町人のわしがだ、この手で零落させた連中の子供をこき使って、奴隷みたいに、跪かせるなんて、何たる名誉」と豪語し、他者を踏み台にして自分より下に置くことで得た自分の地位に優越感を示す。他方で、「これが金持ちのプライドでもんさ。わしらと上流のお歴々の間には、昔から、反目以上の、不思議な憎しみがあってな」と、上を見上げればどれほどの富を持ってしても絶対に越えられない階級の壁が依然としてあることを吐露する。⁵

Overreach: And 'tis my glory, though I come from the city,
To have their issue whom I have undone,
To kneel to mine as bondslaves. (2.1.95-97)

'Tis a rich man's pride! there having ever been
More than a feud, a strange antipathy,
Between us and true gentry. (2.1.102-04)

町人の出身から財を成した者が直面する貴族階級との隔たりは、オーバーリーチのように強欲の塊として描かれる人物でなくとも、内面に屈折した感情を引き起こす要因となり得たのである。

町人出のオーバーリーチが貴族に対する憎しみを吐露するのと同じように、貴族の身分にあるオウルワース夫人とラァヴェル卿も、町人と関わりを持つことをはっきりと拒絶する。4幕1場においてオウルワース夫人は、「あの娘がいかほど持参金を持って参りましょうと、父親の名を決して忘れぬ人たちの口塞ぎはできませんわ」と語り、オーバーリーチの娘であるマーガレットの美しさや純潔さを認めつつも、町人と縁故関係になる嫌悪感の方が勝ることを示す。またラァヴェル卿も、娘を自分と結婚させたがっているオーバーリーチの魂胆を見抜いており、「オーバーリーチの財産が三百倍、娘が何百万倍美しかろうと、口実にできる前例がどんなにありましょうと、わたしはマーガレットを妻にして自分の血を汚し、一方は貴族、他方は町人、混ぜ合わせてできた子供なぞ残しはいたしません」と言い、町人の血が混じった子孫を残すことなどあり得ないと断言する。

Lady Allworth: yet she cannot,
With all that she brings with her, fill their mouths,
That never will forget who was her father. (4.1. 237-39)

Lord Lovell: Were Overreach's states thrice centupled, his daughter
Millions of degrees much fairer than she is,
Howe'er I might urge precedents to excuse me,
I would not so adulterate my blood
By marrying Margaret, and so leave my issue
Made up of several pieces, one part scarlet,
And the other London blue. (4.1. 257-63)

町人出のオーバーリーチと、貴族のオウルワース夫人やラァヴェル卿の語りには、裕福な市民層の台頭がもたらす社会的変化の途上にあつてなお、階級間に依然として存在する互いへの牽制と、血縁関

係というさらなる深みに一步踏み込むことへの拒絶感を読み取ることが出来る。

そもそもオーバーリーチは、舞台上に登場する前から、既にウェルボーンとオウルワースの間の会話において「強欲」(‘Cormorant’ (1.1.160)) な「吝嗇家」(‘the base churl’ (1.1.182))として噂に挙げられ、「隣人の喉も平気で掻き切る」(‘cut his neighbour’s throat’ (1.1.195)) ことをためらわない悪の権化のごとく観客に提示されている。また、財力と娘という二つの持ち駒を武器に、方々で実権を握る機会を伺う彼の傍には、マロウルやグリーディのように、損得勘定だけで彼に取り入る人物も集まってくる。つまりオーバーリーチは、町人でありながら強欲であるというだけでなく、その強欲さでもって同類の人物を惹きつける吸引力を有しているがゆえに、貴族にとっては道徳的にも受け入れ難い人物と映るのである。強欲な人物を悪の表象と結びつける演出は、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*, 1596) におけるユダヤ人シャイロックにも見てとれる。1幕3場において商人アントーニオは、シャイロックを「悪魔も手前勝手な目的のために聖書を引用する」(‘The Devil can cite Scripture for his purpose’ (1.3.94)) と悪魔よばわりする。⁶ 金への執着から相手を陥れることも厭わない人物を悪の表象として舞台上に表出している点で、シャイロックとオーバーリーチの描かれ方は共通している。シャイロックは、法廷で商人アントーニオの肉1ポンドを要求しながら、血を一滴も流すべからずという実行不可能な命令をポーシャに下され、為すすべもなくその場から立ち去る。彼は、助命という慈悲を押しつけられ財産を没収される形で、他の登場人物たちのコミュニティにおける大団円の圏外に追いやられる。

しかし、悪の表象として位置づけられる二人の強欲な登場人物の、劇の結末での扱われ方は異なる。シャイロックの場合、命はかろうじて助けられたものの、最終的には舞台上から姿を消し、商人たちのやりとりとその後の彼への関心を伺わせる言及もない。娘のジェシカは父親とその宗教と訣別し、ロレンゾーとの恋語りにも夢中になるが、父親を気遣う言葉は彼女の口からは聞かれない。それに対し、『古い借金を新しく返す方法』においては、劇の終わりの場面でイントリグ・プロットの懲らしめの要素がいつの間にか薄れ、観客は、オーバーリーチの狂気を治療するという別の方向へ関心を向けさせられる。オーバーリーチの迎える結末には、悲劇的断絶や排除ではなく、道徳的救済という秩序回復への道すじが示されるのである。

2. 治療による道徳的矯正—病的症状の意味—

オーバーリーチは、娘をラヴェル卿と結婚させようとして自ら仕組んだ計画が目の前で崩れていくことにより、ついに発狂する。彼は、自分の周りに集まった人たちのことを「首くり人ども」(‘hangmen’ (5.1.460)) や「悪魔の大群」(‘legions of accursed spirits’ (5.1.467)) が襲ってくるかと錯覚し、それでも自分は抗ってやると息巻いて地面へ猛進する。だが彼の目論見の失敗が発狂という顛末で片付く劇展開は結果として、彼の居場所を剥奪することを回避する機能を果たす。

5幕1場において、オーバーリーチの取り乱した振る舞いを目の当たりにした牧師ウィルドゥは、彼を確信犯的な罪人ではなく、極度の病的症状を発した人物と見做し、彼を「暗い部屋に」連れて行くよう登場人物たちに勧める。⁷

Willdo: Carry him to some dark room,
There try what art can do for his recovery. (5.1.475-76)

治療の必要性を指摘したウィルドゥの助言により、登場人物たちのオーバーリーチへの反応は、彼への憎しみから、看護を必要とする病人への憐れみに変えられる。さらにラヴェル卿は、オウルワースとマーガレットに「お二人を、正気を失った病人の看護役にするようにいたします」(‘I will endeavour you shall be his guardians / In his distractions’ (5.1.482-23)) と指示する。貴族であるラヴェル卿は、オーバーリーチを追放するのではなく、彼の身内に介護の役割をあてがうのである。このような采配はすなわち、オーバーリーチの狂気が致命的なものでも悪でもなく、治療を通して快復すること、そして快復と同時に彼の強欲な性格も自然に矯正されることへの期待が前提となっている。彼への懲罰は回避され、道徳的な効果を持つ対処法として、治療という別の方法が用いられている。ちなみに懲罰という形を取ることなく登場人物を改心させ、徳を高める方法として、LeMahieu は 1597 年に出版されたトマス・デロニー (Thomas Deloney, c.1543-c.1600) の『ニューベリーのジャック』(*Jack of Newbury*, 1597) の例を紹介し、交換という行為が人を徳へ向かわせ、その結果として公共の益に寄与する劇構造について説明している。

It is not through the punishment of vice that the poor (in virtue as well as wealth) will rectify their ways, but through the gift of a virtuous example. The imitation of such virtue, Deloney implies, will lead to individual social mobility that will ultimately benefit the commonwealth, just as one sees in the case of Jack. (LeMahieu, 138)

オーバーリーチへの病的診断と、彼に治療を施すことを階級を問わず厭わない登場人物たちの反応には、市民社会における既存の秩序回復と、相互の関係修復へ向かおうとする側面が見て取れる。

矯正が懲罰にとって代わる仕組みについて、ミシェル・フーコーは特に 18 世紀以降の現象を中心に論じ、身体的苦痛を伴う刑罰が精神的な矯正主義へ移行する仕組みを「われわれは罰しはするが、しかし、それはなんとか治癒してやりたいと思うわれわれの願いの一つの表現なのだ」(28) という言葉で説明している。⁸ オーバーリーチの発狂は、周りの人物に憐れみを催させ、治療によって快復させてやりたいという心情の変化をもたらす効果を持つ。その結果、この場面では狂気の治癒が第一の目的となり、彼の強欲さへの懲罰は影を潜めることになる。この治療は同時に、彼の強欲への執着が完全に消滅するという期待と結びつけられており、病気の治療は、彼を道徳的に矯正し、市民社会に再び受け入れるための素地を作る再生過程として機能する。さらにマーガレットという身内の人物が彼を看護することにより、親子関係も断絶することなく継続していくことが観客に示唆される。

オーバーリーチがコミュニティから排除されず、治療後に復帰する余地が残される背景について、当時のイングランドが置かれた経済的状況との関係において捉えることも可能であろう。Brenner に

よると、イングランド王室は、16世紀後半から海外との度重なる戦いに晒され多くの負債を抱えていた。ジェイムズ1世の時代に入るとさらに経済状態が悪化し、1618年までに負債は90万ポンドにまで膨れ上がっていたとされる。(200) また、戦いのために王室の基盤を支える貴族の支援が必要であった一方で、商人たちの存在も社会の経済的基盤を支える上で重要であった。海外市場の勢いに脅威を抱いていた国内の商人たちにとっても、彼らの経済活動を支える上で国王とのつながりは重要であった。

Organizing for war was a fundamental form of organizing the aristocracy and, in particular, of solidifying the aristocracy's backing for the king.... The fact remains that the Crown was unable or unwilling, for extended periods, to avoid involvement in foreign warfare, and this placed intolerable strains on the royal treasury. The material foundations of the merchant community's alliance with the Crown were therefore crystal clear: the Crown could, and did, create economic privileges for the merchants; the merchants offered loans and taxes, as well as political support, to the Crown. (Brenner, 200)

チャールズ1世の治世に入っても、国王の外交政策に対する議会の不満なども相まって経済状態は改善されず、人々は引き続き不安定な社会状況の中に置かれた。このような中で、たとえ階級間の意識に溝があったとしても、コミュニティにおける相互依存関係を打ち壊し、絶対的な分断を前面に押し出すようなあらすじを展開させることは得策ではなかったであろう。オーバーリーチのような人物も、金まわりの才に長けているという点で、排除の対象とはし難いのである。この劇に見られる相互依存関係について、Leinwandは次のように述べている。

And, third, the unavoidable interdependencies that the relations among all of play's characters reveal explain the remarkable animus felt at every turn. They despise one another because they are bound to one another, because a Welborne or a young Alworth can no more fulfill his desires without affiliating himself with the Overreach family than the latter can satisfy their ambitions apart from Nottingham's Welbornes, Alworths, and Lovells. . . . On the other hand, they cannot seem to make do without one another. (86)

お互いに反目し合いながらも、それぞれの立場の安定性を維持するためには相互の存在を必要とせざるを得ない登場人物たちの絡まった関係性が、この劇においては様々な形で描かれているのである。

3. 親子の絆と社会秩序—放蕩息子の改悛との共通性

5幕1場においてマーガレットは、正気を失くした父親に「ああ、お父様、可哀相に！」(‘O my dear father!’ (5.1.477)) と思わず憐みの言葉を発する。この場面はちょうど、『リア王』の4幕4場で気が狂った父親を目の当たりにし、娘のコーデリアが「人間の知恵で乱れたお心をもとにもどすことはできないものか」(‘What can man's wisdom / In the restoring his bereaved sense’ (4.4.8-9)) と嘆き、なんと

か治療の方法を見つけれないかと案じる場面と重なる。マーガレットの台詞は、少なくとも彼女が心情的に父親を見捨てていないことを表している。⁹『ヴェニス商人』においては、父親と似ても似つかない女性としてロレンゾーに愛されるジェシカは、父親を改悛させるための役割は担わされていない。シャイロックの財産没収後、ジェシカから父親を気遣う言葉は発されず、またシャイロックも娘の前から姿を消すが、そこにはもはや、父親と娘の繋がりを維持することへの期待は描写されていない。

『古い借金を新しく返す方法』において、マーガレットは、夫となるオウルワースと一緒に父親を看護するようラヴェル卿から言い渡され、それを素直に受け入れる。オーバーリーチの妻は最初から劇に登場せず劇中で言及されることもないため、この劇では、父親と娘の血縁関係が重要な役割を果たす。マーガレットは、父親を治療し、快復へ向かわせるためのいわば救世主のような存在として象徴的に位置づけられる。親子関係の絆は断ち切られることなく継続されていき、彼女は唯一、娘として父親を本来あるべき姿へ戻していく導き手になる。父親を見捨てない娘という位置づけは、病気の治癒といった道徳的矯正とともに、あらずじ全体の喜劇的流れの中に取り込まれる。

またこの劇では、マーガレットとオーバーリーチの親子関係は、放蕩息子ウェルボーンが改悛へ向かう主筋と並行して展開している。1幕1場でウェルボーンは、飲み代を払わないことを居酒屋の亭主タップウェルに咎められ、治安判事であった立派な父親と比較され、嘆かれる。しかし彼は劇の最後の場面において、オウルワース夫人の協力も得て無事に父親から継いだ土地を叔父のオーバーリーチから取り返し、名誉を挽回する。彼はいわば、本来居るべき嘗ての父親の場所へ帰ってきたのである。さらに彼は、ラヴェル卿に一中隊を所望し、「王にも祖国にも一身を捧げ」て「名声を回復する」ことを誓う。

Wellborn: if your lordship
Will please to confer a company upon me
In your command, I doubt not in my service
To my king and country but I shall do something
That may make me right again. (5.1.497-501)

放蕩息子であったウェルボーンは、父親の土地を取り戻すことで親子の絆を再確認することになる。さらに国と祖国に身を捧げるといふ彼の名乗りは、長引く戦いに疲弊し、経済的にも不安を抱えていた当時のイングランドにあって、理想とされる社会復帰の形として演出されたとも言える。ウェルボーンの土地奪還は、マーガレットとオーバーリーチの関係と並行して、親子関係の継承という形で結果としてコミュニティの秩序に結びつけられているのである。

終わりに

これまで述べてきたように、強欲の塊であるオーバーリーチも、放蕩息子ウェルボーンも、最終的

には秩序あるコミュニティの笑いの中に引き戻され、ひとつの喜劇的世界を創り上げる役割を担っている。演劇が、多くの客層に見られることを当て込んで上演されるものである以上、劇作家はできるだけ観客の期待に応えるべく作品を書くことを意識せざるを得ない。このように考えれば、国王一座で共作も含め多くの作品を手がけた作家として、マッシンジャーの作品に、当時の社会の明暗のうち「明」の部分の主軸にした道徳的側面を見るのは自然なことであろう。現実の社会においては、異なる階級や立場に位置する人々の間で様々な軋轢が生じたと考えられるが、『古い借金を新しく返す方法』においては、登場人物たちの複雑な関係を纏れた糸をほぐすように劇中で徐々に解決させていく点で、マッシンジャーの喜劇の独特の展開と、彼の劇作家としての手腕を見出すことができるのである。

注)

- 1 本文中の *A New Way to Pay Old Debts* の引用は、Stronach 編注になる J. M. Dent 版(1904)に拠る。日本語のタイトル表記については、山田英教訳（早稲田大学出版部、1989年）に従った。
- 2 特にチャールズ 1 世即位後の宗教をめぐる状況の変化は、1630 年代以降、少なからぬ人々の移動を引き起こした。（‘The impulse during the 1630s was different: the radical religious changes brought about by Charles I’s regime encouraged many gentry, clergy and ordinary people who had no inclination to separatism to uproot themselves and try the hazards of a long Atlantic voyage.’ (MacCulloch, 535)）
- 3 『ロミオとジュリエット』におけるロレンス修道士と薬屋の役割の同質性について、拙論『『ロミオとジュリエット』におけるロレンス修道士と薬屋の関係をめぐって—二人の役割の同質性とその宗教的背景—』（『英文学研究』 支部統合号 Vol. IV, 385-92, 2012 年）に詳しく述べた。
- 4 Perry はまた、エリザベス 1 世からジェイムズ 1 世の時代へ移ると、王室に対する市井の人々の忠誠心も変化し、それに伴い彼らの自己形成（‘the civic self-fashioning’）へ向けた動きが保守層との軋轢を生んだり、また市民と王室の関係が希薄になるにつれ、「彼らとジェントルマンの境界も曖昧になった」と述べる。（‘Civic pride becomes more autonomous as the city’s special relationship with the crown ceases to play a central role in it; the distinction between the citizen (Stow’s “playne man”) and the gentleman becomes blurred.’ (Perry, 190)）
- 5 『古い借金を新しく返す方法』引用の日本語訳については全て、山田英教訳を用いた。
- 6 『ヴェニス商人』のテキスト引用についてはアーデン版、また日本語訳は小田島雄志訳を使用した。
- 7 山田は日本語訳（早稲田大学出版）のテキスト注釈で、狂気に陥った人物を暗い部屋へ連れて行く治療法が、『十二夜』におけるマルヴォーリオへの言及にも見られることを指摘している。（180）
- 8 フーコーはさらに、死刑囚に対する対応について「従来とは異なる抑制策のために、死刑執行人、すなわち死刑囚の苦痛にじかにふれる解剖家のかわりに登場してきたのが、一団の専門家たちであった。すなわち、看守、医師、司祭、精神病医、心理学者、教育者である。」（16）と、対象人物のより内面に関わっていく過程を論じている。
- 9 『リア王』のテキスト引用についてはアーデン版、また日本語訳は小田島雄志訳を使用した。

参考文献

- Brenner, Robert. *Merchants and Revolution: Commercial Change, Political Conflict, and London's Overseas Traders, 1550-1653*. London: Verso, 2003. First Published by Princeton University Press, 1993.
- Chalfant, Fran C. *Ben Jonson's London*. Athens: The Univ. of Georgia Press, 1978.
- Gifford, W, ed. *The Plays of Philip Massinger, in Four Volumes*. Vol. 1. W. Bulmer and Co. Cleveland-Row, St. James's, 1805. Rpt. *The Plays of Philip Massinger: Introduction; Essay on the Dramatic Writings of Massinger; by John Ferriar; Commendatory Verses on Massinger; A List of Massinger's Plays; Glossarial Index. The Virgin-Martyr. The Unnatural Combat. The Duke of Milan*. Miami: HardPress, 2019.
- Leinwand, Theodore B. *Theatre, Finance and Society in Early Modern England*. Cambridge: CUP, 1999.
- LeMahieu, Michael L. 'Gift Exchange and Social Hierarchy in Thomas Deloney's *Jack of Newbury*'. Ed. Linda Woodbridge. *Money and the Age of Shakespeare: Essays in New Economic Criticism*. New York: Palgrave Macmillan, 2003. 129-41.
- Limon, Jerzy. *Dangerous Matter: English Drama and Politics in 1623/24*. Cambridge: CUP, 1986.
- MacCulloch, Diarmaid. *Reformation: Europe's House Divided 1490-1700*. London: Penguin Books, 2003.
- Massinger, Philip. *A New Way to Pay Old Debts*. 1633. Ed. George Stronach. *A New Way to Pay Old Debts; A Play Written by Philip Massinger*. London: J. M. Dent and Co., 1904. Rpt. Charleston: BiblioLife. n.d.
- Perry, Curtis. *The Making of Jacobean Culture*. Cambridge: CUP, 1997.
- Shakespeare, William. *King Lear*. Ed. R. A. Foakes. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury, 1997.
- Shakespeare, William. *Romeo and Juliet*. Ed. René Weis. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury, 2012.
- Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. Ed. John Drakakis. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury, 2010.
- シェイクスピア、ウィリアム 『ヴェニスの商人』小田島雄志訳 白水社、1983年
- シェイクスピア、ウィリアム 『リア王』小田島雄志訳 白水社、1983年
- 丹羽佐紀『『ロミオとジュリエット』におけるロレンス修道士と薬屋の関係をめぐって—二人の役割の同質性とその宗教的背景—』（『英文學研究』支部統合号 Vol. IV., 2012年）385-392.
- フーコー、ミシェル『監獄の誕生』田村俣訳、新潮社、2020年
- マッシンジャー、フィリップ『古い借金を新しく返す方法』山田英教訳、早稲田大学出版部、1989年